『天の夕顔』　光と影

根来　澪子

我が家の玄関から奥の寝室に通じる廊下の中ほどに、ずいぶん前から古びた色紙が飾ってある。亡夫の手製による彫刻の施された木製の額縁に収まって、色紙は四十年経った今でも色あせることなく、しかしあまり人の目を引くこともなく、ひっそりとそこにある。色紙には次のように書かれている。

「美しきものは　永遠の喜びなり　　与一」

変体仮名を用いて書かれた字は、お世辞にも達筆とはいいがたいものだが、昭和の初期から戦後にかけて、ロマン派の作家として名をはせた中河与一の直筆である。

中河与一は昭和五十五、六年ごろ、私の住む秦野市の公民館で講演をした。長女が中学生だった頃のことだ。当時中学のＰＴＡに「成人教育委員会」という組織があって会を担当していた文学に熱心な国語の教師が、活動の行事として中河与一に講演を依頼したのである。中河は小田急沿線の成城に住んでいて、別荘が箱根板橋にあり、同じ沿線の秦野市とは無縁ではなかった。

氏は快諾され、公民館の和室に三、四十人の聴衆が集まった。明治三十年生まれの中河は、当時八十二、三歳ぐらいの年齢だったと思う。もう四十年も昔のことで記憶も定かではないが、印象は小柄な、貧相な風貌だった。小さく背中を丸めて座っている姿は老人そのものであった。彼は、その後、俳人であった幹子夫

人を亡くし、二年後には八十五歳で再婚し、帝国ホテルで披露宴を行っている。そのような情熱を秘めていたのだと後で聞いて驚いた。私が差し出した色紙に気持ちよく応じてくれた。

年々、新人作家があふれるように輩出される現代にあって、昭和を代表する浪漫派の作家のひとりとして華々しく活躍した中河与一の名はもはや忘れ去られているかもしれない。しかし映画化もされた『天の夕顔』という小説については八十代ぐらいの人たちにとっては青春時の美しい物語として懐かしく思い出すに違いない。

昭和十三年に書かれた『天の夕顔』は、発表当時は話題に乗らなかったようである。しかし、永井荷風に絶賛され、数か国語に翻訳され、海外でも読まれるようになり、フランスの作家アルベール・カミュに絶賛されるに及んで国内でも読者を増やし、名を文学史に残すことになった。私も昭和三十年代の学生時代に読んで、ロマンチシズムをくすぐられたものである。

『天の夕顔』という作品は簡単に言えば、生涯を投じて一人の女性を愛し続けたが、彼女の死によってついに愛を達成できずに一生を棒に振ったという男性の二十数年に及ぶ悲恋物語である。冒頭、次のような文章で始まる。

「信じがたいと思われるでしょう。信じるということが現代人にとっていかに困難な事かということはわたくしもよく知っています（略）。わたくしは一つの夢に生涯を賭けました。わたくしの生まれてきたことの意味は、だから言ってみればそのはかなげな、しかし、切なる願いをどこまで貫き、どこまで持ち続けるかということになるのです」。一人称で語られるこの小説の主人公は竜口（たつのくち）といって京都の大学に通う天文物理学の学生である。大体のストーリーは次のようである。

「わたくし」が生涯を通じて恋い慕うようになった女性の名は「あき子」だが、作品中では固有名詞ではなく、ほとんど「あのひと」として表現されている。わたくしが下宿をしていた家の娘であり、すでに神戸に嫁いでいて、男の子もいる七歳年長の、二十八歳の人妻であった。下宿屋の女主人（すなわちあき子の母）が亡くなり、お通夜や四十九日の法要などに参加して彼女と話す機会をもつようになり、しばしば神戸まで会いにいく。彼女から借りた本の間に「いつも会いたいとおもうばかりに」とか「忘れじの行く末までは難ければ今日を限りの命ともがな」という高内侍の歌が

書いてある紙切れがはさんであったりして、わたくしはそれが自分にあてたものか、思いめぐらせているうちに、あの人から会って話がしたいと言ってきて二人は会う。

彼女は「夫が外国で仕事をしていること、むなしく過ごしているときにあなたと出会ったこと、弟のようなあなたと交際することは幸せであったが、これ以上会っていると危険ではないかと思うに至り、お別れに参りました」という。わたくしはその時まで、彼女との間に恋愛の気持ちはなかったつもりだったが、自分の中にも熱い思いがあることに改めて気付き、言うべき言葉を知らなかった。

これが彼女から突き放された最初であり、その後二十幾年、彼女を思い続ける宿命を持つようになったのであった。彼女からの愛の告白は、同時に二人に未来のないことを思っての別れの挨拶であった。

それから二年、わたくしは彼女の言うとおりにしていたが、わたくしの父の訃報が新聞に載った時、突然あのひとから、哀悼の言葉とともに、自分はやっと過去の境遇から抜けることができたようにおもうという手紙をもらった。わたくしは有頂天になってあのひとの家を訪ねた。あの人は言った。「あなたを思い切ろうとしてどんなに苦しんだかしれません。その苦しみに耐えてまいりました。もしこれからのお付き合いで、自省できず、いけない、と思ったらすぐに逃げ出してもようございますね」。それはわたくしたち二人がお互いの極致の愛を確認しあった記念すべき時であった。

わたくしたちは川縁を散歩し、あのひとは川辺に咲く夕顔の花を摘み取った。自然に何の無理もなく二人は初めて抱擁しあった。わたくしはもうどんなことがあっても別れないと決心し、強く寄り添い、唇をふれあい、至福の時間を過ごしたのであった。しかしそれはつかの間の幸せであった。

またもや、わたくしの有頂天な気持ちとうらはらに、彼女から交際を拒絶する旨の手紙を受け取ることになる。「この数週間お逢いできたことがどんなにうれしかったか、お会いするほど苦しく、切なく、自分を制止できなくなってしまうこと、一日遅れれば遅れるほど取返しの付かないことになってしまう私を憐れんでください」と手紙には書かれて、手紙の余白に建礼門院の次の歌が付け加えてあった。

今はただ　しいて忘るるいにしえを
思いいでよと澄める月かな

わたくしは狂ったように彼女の家の周りをさまよっ

たが、ついに戸は閉められたままで、開けてくれることはなかったのである。
わたくしの心にも己に打ち勝とうとする精神があり、逢いたい、しかしそうすることがあの人に苦痛を与えるのであれば自制するべきであると自分に言い聞かせる。あのひとに結婚を破壊する決意がない以上それを求める権利はないのだ。わたくしは大学を卒業すると同時に沼津の連隊に入営し、兵役をすませると富士山麓の気象観測所の所員となる。そこで近くに住む娘と親しく話すようになり、肉体的興味から深い関係になり、彼女の兄から結婚を迫られる。
その時わたくしは別れて五年になるあの人に会ってこのことを相談してみようと思い立ってはやる気持ちを抑え、神戸の彼女の家を訪ねてベルを押す。二十七歳の夏のことであった。彼女は気持ちよく会ってくれたが、その顔には少しの動揺と覚悟が現れていた。やさしく迎えてくれたが、相談事を話すと厳しく「その人と結婚をしなさい」とつきはなされる。会って話ができるという喜びに燃えながら訪ねたのに、寂しく打ち沈んで帰ることになって天国から牢屋に送り込まれるような心境だった。「抱いてほしいんだけど」「わたくしが後で一層くるしいから」。これがあの人の三度目の拒絶であった。
わたくしはもしかしたらあの人を忘れることができるのではとの思いで、その娘と結婚をする。しかし彼女はまもなく肋膜になり、わたくしは転地をさせたり、病院に入れたり、二年ほど介護をするが結婚というものに懲り懲りし、病身の妻を実家に帰し、離婚した。
結婚の失敗によってわたくしはあのひとを一層慕わしくあの人のために生きようと改めて決心したのであった。
それから三、四か月して東京に転勤した。あのひとに初めて会った時から十年の歳月が過ぎていた。ある日全く偶然に電車の中であの人に巡り合うのである。あのひとも神戸から東京に出てきていたのだ。突然の運命に呼び寄せられたようにあの人の後を追う。「同じ気持ちを持っていてくださるのでしょうか」と必死の思いでたずねる。「男の方ってなんでも好きなことがお出来になりますから……」といって彼女は小走りに走り去ってしまった。わたくしは愕然としてもっと話し合いたいという思いから、東京の彼女の家を必死になって探す。やっと代々木上原にある彼女の家を探し当てて対面することができる。「わたくし、まだあなたに御目にかかることはできないような気がします

の。たとえこの首が飛んでも、もうこの決心を動かそうとは存じません。わたくしはあなたのことを祈り続けてきました。でも何かの摂理に従うよりほかにないのです」。二人の喜びはいつも頂点に悲しみを用意しているのだ。

初めに燃えたのはあのひとのほうであった。今は自分がこんなに切ない思いで耐えている、でもあの人も苦しんでいる。これ以上**苦しめる**権利は自分にはない。むしろ彼女からこんなにも離れられないのは、わたくしの申し出を拒否しているからで、そのままやすやすと受け入れるような人なら、とうの昔に失望していただろう、あのひとの道徳感が、わたくしの想いをかりたてていくのであった。これが四度目の拒絶であった。拒絶されるほどにわたくしは彼女を神聖化し、想いは激しくなるばかりであった。

「もし寂しさということが自分に背負わされた運命なら自分はその寂しさに徹しよう」とわたくしは自分の持ち物をすべて処分し、山に入るために畑の中で二年間のテント生活を経験し、信州の山々を渡り歩き、飛騨の「山之村」という僻村に行きつき、そこに住む決心をする。そうして壮絶な山の四季を味わうのである。冬、毎日のように雪が降り積もり、交通が途絶し、来る日も来る日も大根の味噌汁ばかりをすすった。たった一人っきり、話しかけることも見るものもなく、そうなるとあの人の面影がなおさらはっきりと浮かんでくるのであった。わたくしはわたくしにだけこだまする雪山の中で、最も激しい愛情を表す言葉で彼女を狂気のように呼び続けたのであった。

わたくしはこうして凛然とした寒さと寂寥とに対峙しながらあのひとを純粋に完全な神として思い焦がれていた。春になり、あのひとにあいたいという思いを断ち切ることができずについに飛騨の山奥から一気に下山していった。山の過酷な生活を便箋三十枚にしたため、それを懐に入れてあの人の家を探した。いつのまにか代々木上原ではなく杉並に居を移していた。あのひとは突然、戸口に立ったわたくしを認め、おどろいた表情だったが、目を輝かしてわたくしのほうに近づいてきた。そうしてわたくしを奥座敷に通してくれた。

あの人はすでに四十七歳になっていて、顔からは若さが消えていた。しかしわたくしはあのひとの若さを愛しているのではない、結婚がしたかったのではない、ただ自由に話をしたかった、傍にいたかった。わたくしは本当にそれだけでよかったのだ。その時、あのひ

とは言った。「五年経ったらおいでになってもようございますわ」その言葉は天啓のように響いた。
「わたくしはあなたをどんなに避けたでしょう。でももう一つの心はもっとつよくあなたをお呼びしていたのです。五年の間に息子が大学を卒業して就職をすること。ただ妻という母という名のもとに生きてきましたが、五年経てばすべてのしがらみから解放されるでしょう」とあのひとは静かに語った。
わたくしは半ば死の決心をして降りた山を今度は前途に希望をもって登っていった。いまや五年の歳月など、何ほどのことでもなかった。人間としてこの世に生まれてきたことのさびしさのなかにあって、あのひとに逢えたというそれだけでもありがたく喜びだったのである。七歳年上であることのためにこのような運命を受けなければならないという不条理も、まもなく解決しようとする五年目が来ようとしていた。わたくしは四十三歳になっていた。いよいよあと一日でその日が来るというときにわたくしはあのひとが末期の想いで書いた手紙を受け取ったのである。「病気をしながらもお約束の前日まで生きたことを褒めてくださいませ。わたくしを許してください……」。それははっきりとしたあのひとからの死の予告であった。

二十三年想い続けて愛する人を失ったとき、四十五歳になった竜の口は次のように述懐する。
「生涯の間、男として生まれてきて、本当に何もしませんでした。言ってみれば一生を棒に振ったのです。功利の世に生まれてそこに生きるすべを知らず、自分を破壊に陥れたのです。（略）だが、たった一つ、心を込めて、本当に、あらゆるものを顧みないで、あのひとを愛し続けたということだけは少しの不安もなく言い切れます。わたくしは天国にいるあのひとに消息する方法をみつけたのです。好きだったのか、嫌いだったのか今は聞くすべもないけれど、かって、あの人が、摘んだ夕顔の花を花火として届けるために、狂気したわたくしの喜びのために、花火師と一緒に野原の中に立ちたいのです。夢のようにはかなく消える一瞬の花を天にいるあのひとが摘み取ったのだと考えて、それを自分の喜びとするのです」
一人の女性に生涯をかけた不器用な男性が一人称で語る愛の形は古典から引用されている短歌にも品格があり、私の学生時代に流行した「無償の愛」の典型であり、まさに純愛の書であり、青春時代のバイブルであった。

公民館に集まった私たちは講演の後、当然ながら話題は『天の夕顔』についての感想に集中した。皆、純粋無垢な主人公の得難い愛の物語に打たれたと熱っぽく語った。彼は、拒絶されても未練がましく跡を追っていくような現代風のストーカーではなく、むしろ物理学を専攻し、剣道に打ち込む硬派で自分を律することに厳しい男性である。あき子も又、人妻である自分の立場をわきまえ、凛とした態度を貫きとおした。倫理をわきまえたストイックな女性であったがゆえに結ばれることのないこの小説の「質」を高めているのだと、私は感想をのべた。

ところが氏は次のような意外な話をした。

「あの小説ほど私を悩ましたものはないのです。大体のストーリーは、戦争で外地に出向いていくある男から聞いた話を自分なりに脚色して、私自身の美意識に基づいて書いたのですが、彼が復員して帰ってきて、このモデルは自分であるからと、高額のモデル料を請求されたのです。彼との間にいざこざが長く続き、愉快な小説ではなくなってしまったのです」

それはかなり衝撃的な発言であった。モデルと作品の内容についての事実関係でもめることはしばしばあることだが『天の夕顔』についてはそんな醜いトラブルはあってはならないことのように思えて、作家という立場も大変なことだと大いに同情したのであった。しかし昭和三十年ごろにはモデルとの確執は文壇で表面化していたようであり、私が知らないだけであった。

『天の夕顔』のモデル問題を詳しく知るようになったのは、講演を聞いてから十数年もあとのことであった。偶然に本屋で手に入れた中井三好著『「天の夕顔」のかげで―不二樹浩三郎愛の一生』（彩流社）を読んだことによる。著者中井三好は俳人で「俳句往来」という雑誌を主宰しているらしい。この本は二〇〇五年に出版されているから不二樹も中河も亡くなってから出版されたものである。（不二樹は一九九〇年九三歳、中河は一九九四年九七歳で死没）。

中井三好は『天の夕顔』のモデルとされる不二樹浩三郎の生涯の足跡を丁寧に取材している。

ことに飛騨の山奥に入ってからの取材は大変だったろうと思うが、不二樹が親しく接した村の人々からの聞き取りに労力を費やしている。この本は彼の評伝と言ってもいいだろう。不二樹家は大阪に「大日本精糖会社」を創設して栄華を極めた。自由思想の父親の影響で同志社大学を卒業したが、晩年、神奈川県の志田山

特養ホームで九三歳の生涯を閉じるまで、放浪に等しい生活をし、岐阜県山之村にこもったり、柔道場で按摩を習得して職業としたり、世俗的には不本意な人生だったようだ。

しかし、若いころは明るくて爽やかな青年であった。大阪の実家から京都の下宿に帰ってきたとき、彼は美貌と才媛をかね備え、日ごろから慕っている実の姉文子と見間違えるような妙齢の美しい夫人と出会うのである。彼女は下宿屋の娘で他家に嫁いでいたが、琴やお茶、お花など稽古ごとは言うに及ばず、禅についての知識も相当なものであった。この女性こそが『天の夕顔』のヒロイン、七歳年長の「あき子」、すなわちモデルの合田勝代である。

二十歳年上の夫はシカゴ大学の教授になり、アメリカに赴任し、一人息子と二人だけで神戸で寂しい毎日を送っていた。下宿の女主人、すなわちあき子の母の葬儀に続く四十九日の法要の手伝いなどをして言葉を交わすようになり、手紙のやり取りをする間柄になったが、次第に彼は勝代の自分に対する熱い想いを知ることになる。小説のなかにも異なる表現で出てくるが、ときどき彼女から借りた本に挟んである紙切れには次のように書かれていた。

「尊い人、わたくしそう思って生きているわ」「いつも思っているわ、あなたは許してくださるかしら」。七歳年長の勝代からこのような思いを知らされることになり、彼も又彼女からの手紙を待ち、思慕の念を募らせていったのである。

二人の間柄は世間に知られることとなって、夫と子供もある彼女との交際は好ましいものとはいえず、関係を断つように周りから説得されて、引き裂かれるように彼は下宿を変える。そこでの下宿の娘信子についても淡い恋情をもったようであるが、やがて大学を卒業し、中学教師として伊賀上野に移り住み、下宿先の栄子という女性と肉体的な関係になり、それを知った栄子の兄に強制されるような形で結婚をするのである。結婚の相談のために彼は合田勝代を神戸に尋ねる。彼女は結婚を勧め、「どうぞわたくしのことはわすれてください」と冷たくつきはなす。しかしそれは彼女の本心ではなく、どんなに悲しく己に打ち勝つのに必死だったかを後の手紙で知ることになるのだが。彼は絶望的な気持ちで栄子と結婚をする。栄子との結婚は彼女の結核によって破たんした。彼は二年近く懸命に介護をするがそれを乗り切るだけの愛情が育たず、今後の治療代を親にわたし、実家に帰してしまう。離婚に

至ったことを勝代に知らせようと再び神戸まで出かける。勝代はアメリカにいったきり音信もあまりない夫に不安を感じて不二樹に対する自制心を失いかけるのだが、一線を超えることはなく、最後までプラトニックラブを通した。小説『天の夕顔』に描かれている通りである。

父からの莫大な遺産をうけていた彼は北アルプスの山々を登山しまわった。下山しては、あふれるような思いを抑えきれず、神戸の勝代の家を訪ねるのだが彼女は上京していて神戸にはいなかった。二人の交際は周囲に知られ、彼女は人妻として窮地に立たされて逃れるように上京していたのである。やっと探し当てて会うことができたが、彼女の毅然とした態度は変わらず、結ばれることのない愛を確認しただけであった。二人の逢う世は激情に任せた危険な状態になっても最後まで一線を超えることはなかった。人妻としての責任による拒絶であったろう。二人がごく普通の恋人同士であったのは最初の数年であり、あとは、彼の勝代にたいする観念に近い偶像崇拝のようなものであった。

それからの不二樹は渡り鳥のように山々を転々とする。奥飛騨の山之村で二年を過ごし、雪山の過酷な生活を経てそこに落ち着くかに見えたが、その地も彼を満足させることはできなかった。かれはしばしば下山しては、恋い慕う姉、文子に会いに行き姉の化身のような勝代の家を訪ねる。勝代は最後にあった時、静かな面持ちで「あなたと一緒に結ばれることが運命ならば、それに従います」と言ってくれた。ここであらためて勝代を待ち続ける決心をするのであった。

山での生活で、二，三件の女性問題がからんで、山之村を終の棲家とすることのできなかった彼は最終的に下山して、東京世田谷に小屋のような家を建てて住むことになった。そのころには父の遺産の大半を使ってしまっていた。彼は生涯の仕事になるようなものを、と考えるに至り、斉藤師匠の柔道場の門をたたき、柔道を学ぼうとしたが、そこで按摩術を覚えて、按摩の免許を取得し、按摩師として中河与一と出会うのである。

中河与一の妻幹子は斎藤道場に按摩を依頼した。派遣されてきたのが不二樹だったのである。幹子は不二樹を気に入り、しばしば依頼するようになり、やがて中河とも知り合う。そこで彼は自分の身の上話、合田勝代との悲恋を語る。それを中井は次のように書いている。

「小説家への夢を抱いていた不二樹浩三郎が、突然に

応召されて死を覚悟して戦場に赴く時、自分の手で恋の半生を描く時間もなくなり、血を吐く想いで自分がこの世に生きたあかしとして中河に書かせたのが『天の夕顔』である。中河は不二樹の遺言を写し取る様に一字一句不二樹の言葉を書き綴った」

以上のことが、『天の夕顔』のモデルは不二樹であり、自分が語った内容をそのまま描いたのだから共著にしてほしいとか、モデル料を払ってほしいとかいう「事件」に発展するのである。

このことに対する中河与一の反論ももちろんある。『天の夕顔前後』（古川書房）で要約すれば次のように書いている。

「ある日家内が按摩を頼んでやってきたのだが、彼は、正真正銘の経験だと言って話をした。戦争に行けばいつ戦死するかわかりません。私の話を聞いてください。ということで彼の話をそのままノートに書きとり、そのアウトラインにそって構成を考え、興味を持っていた和泉式部の歌を挿入し、作品を組み立てた。ぼくは幾度となく推敲をして仕上げた。彼は戦地からいつ作品を発表してくれるかと催促をして来るので発表する気になった。

最初は黙殺されたが、荷風が褒めてくれたこともあり、次第に読者の歓迎をうけるようになった。ぼくは雑誌が出るとすぐに彼に送ってやった。そのころ彼は復員してきてハナという女性と結婚をし、信州鹿教湯温泉に按摩として住んでいたが、「せっかくの経験だから私も書いてみようと思ったのですが書けませんでした。あれはよくできています」といって喜んでくれた。それが、鹿教湯を引き上げて東京に出てきたころから妙な言いがかりをつけてくるようになった。

彼は、自分の話したことが、そのまま所々に出てくるので著者が一人で印税をとるのはけしからん、自分にも払うべきだというのである。これは明らかに一種の脅迫であった。それは文章というものの秘密、全体の構想といい、それからくる充実というものを知らぬ人間の言いがかりに過ぎない。最後の花火を打ち上げるところなど、二，三年前から心の中に往来していたもので、あの一、二行だけでも簡単なものではない」

不二樹から脅迫まがいのような手紙がきたりして警察に届けるような事件に発展したのである。しかし不二樹は自分がいなかったらこの作品は存在しない、中河の創作などではない、この作品は自分との共著にするべきであると迫り、裁判に訴えると息巻いた。中河から次のような手紙が来た。

「……話をしてくれただけでそれがあなたに何の関係があるのですか。法廷へ出てもどこへ出ても……」

不二樹は怒り心頭に達し、『名作天の夕顔粉砕の快挙』（本人発行）と題して『天の夕顔』がいかに自分からのもらい物であるかを徹底的に暴き始めた。あき子への思いを断ち切るために山之村にこもるのだが、小説の中で表現されている冬山の厳しさや美しさは体験した人でなければ書けないもので、中河にはその体験もないというのである。

裁判も考えたが費用を工面できず、放浪の生活をつづけた彼は戦後の経済の変動によって親の遺産を使い果たし、定職も続かず、断念せざるをえなかった。ハナという献身的な女性と結婚したが、裁判費用はおろか、失意のまま特別老人ホームで九十三歳の生涯を閉じるのである。

一九四〇年ごろ、彼は復員して新宿の陸軍病院に入院していたが、見舞いに来た勝代から彼女の夫が日本に帰国したことを知らされる。アメリカと日本が不穏になり、一触即発の情勢となってきたので、シカゴ大学にいられなくなったのである。それを聞いて不二樹は号泣したという。

一九四五年八月、終戦を彼は鹿教湯温泉で迎えた。その時期、合田勝代は精神的苦労が原因となってか、病の床に伏し、やがては五十五歳の若さで亡くなる。そのことを彼が知ったのは十三年もあとのことであった。

中井三好著『天の夕顔のかげで』で著者はモデルとなった不二樹浩三郎に肩入れして、中河に対しての不二樹の憤懣に共感するかのように次のように書いている。

『天の夕顔』という小説は一般に言われるところの創作のヒントを与えてくれるというようなモデルとは違って不二樹浩三郎が語り終えた半生に中河が若干の修辞をほどこしたということのようである。『天の夕顔』は不二樹が日中戦争に応召する時、本来ならば自分が書くべきであるが、生きて帰ってくることが不可能かもしれないと思い、知人の中河に自分と合田勝代（作品中ではあきこ）との恋のあらましを詳細に語った。それを中河は一言一句そのままに書いたのが『天の夕顔』である」

しかし中井三好は不二樹の生涯を取材するうちに作品には直接関係がないが、彼の人生にとっての重大な発見をした。つぎのように述べている。

「不二樹が中河に語って出来上がった『天の夕顔』の主人公は、不二樹の心の深層のものではなく、単なる表層の極めて一部分でしかないことがわかった。不二樹が中河に語れなかった、いや、死ぬまで誰にも語れなかった不二樹の愛の源泉を筆者は発見した」。

その愛の源泉とは、彼の二歳年長の姉、文子に対する生涯を通じての敬慕の念である。文子は眉目麗しく才たけて、博愛の心を持っていて、彼にとってのヴィーナスであった。彼は中学の高学年になるまで一緒に風呂に入ったという。「西洋の人たちがヴィーナスを愛と美の女神として崇拝し恋しているように、僕はこの世で最も美しい人だと思っています。この思いを恋というなら僕はお姉さんを恋しています」と断言している。

作品のモデルの合田勝代は、姉と瓜二つだという。姉への思慕をこめて、姉の代わりとして彼は勝代を慕ったのであった。『天の夕顔のかげで』（中井著）の作中では、姉は恋の対象としてことあるごとに登場する。山之村での雪との苦闘のなかで人に語ることのできない愛を叫ぶのは姉の名である。合田勝代より、姉にまつわる記述のほうがはるかに多い。姉は西田幾多郎の門下生である哲学者の吉田弘と恵まれた結婚をするが、終生、弟のことを心配し、晩年、故なく唐突に離婚して不二樹の姓に戻り、没落した不二樹家がこの世に存在した証として墓地を再興し、弟、不二樹浩三郎とともに同じ墓にはいるのである。『天の夕顔のかげで』はつぎのように終わる。「不二樹浩三郎は、生涯女神のごとく慕い通した姉文子の待つ、永遠の墓碑の体内の中へとはいっていった」

中河にも語れなかった姉への真実の愛。中井がこの事実を知るにいたった経緯は書かれていない。不二樹の死後、遺品の中からでてきた資料によるのだろうか。しかし、もし、不二樹が中河にそのことを語っていたら、この小説はどうなっていたであろう。構成はより複雑化し、愛は分散し、一筋の純愛ものにはならなかったであろう。『天の夕顔』というものがたりに、不二樹が誰よりも愛し続けた姉の存在は隠蔽され、中河与一はそのことを知る由もなかった。

「作家とモデル」の関係は、むしろ作品のモデルであることが世間に知られることに抗議してもめることが多いように思う。しかし、浩三郎の場合は逆である。自分はこの主人公そのものであり、決して中河の創作ではないという深い思いがあった。が、不二樹の言う

がままを書き写したとしても『天の夕顔』は紛れもなく中河の才能が書かせたものだとおもう。なによりも不二樹は合田勝代が亡くなったことを、十三年もあとになって勝代の姪から知らされるのである。中河に語った時点では合田勝代はまだ存命していたのだ。作品のラスト、夜空に向かって打ち上げる花火をあき子が摘み取ってくれることを願うクライマックスは、まさに浪漫主義作家、中河与一の「美意識」が書かせたものであろう。作家を志したという不二樹は結局何らの作品も世に出すことはできなかった。

不二樹にとっては不本意な中河与一の文学碑が、昭和三十七年、岐阜県大和田峠に建立され次の短歌が刻まれた。

夜深き　山の庵に夢覚めて
　空渡る月を　消ゆるまで見し　　中河与一

岐阜県神岡町山之村森茂地区の高台に昭和四十六年、『天の夕顔』の石碑が建てられ、次のように記された。

「天の夕顔の主人公が　かって此の地に
　庵を結んで幻住す」

（二〇一八年　一二月）